

規模 20x10 軒
構成 次頁 4 軒

1352 16 軒

記述 次頁 4 軒

1,177 軒
洛陽の社会と文化 49~50 軒

381 軒 (不明)
洛陽の社会と文化 49~50 軒

ついで 8 軒、更に 7 軒を移す

洛陽の最外外郭城

曹魏時代に最外外郭城があつたとするならば、その規模はどのようなものであつたろうか。

曹魏時代に最外外郭城があるかと明確に記す文献はなく定かでない。

しかしここには先に述べたことと一部重複する。洛陽外郭城について記

す文献等から曹魏時代の最外外郭城内の様子を摸索してみたい。(一部重複)

世しこの都城を實際に観察した酈道元(五二

の)水経注に「穀水篇」おおよび北魏滅亡後、遺臣の楊街之によつて書かれた洛陽伽藍記によりかなり詳しく知ることが出来る。

ことに、洛陽伽藍記は、北宮・南宮を中心とする南北九里・東西七里の規模をもつ

洛陽王城内の範囲を述べるばかりでなく、

さらに、城東区域・城南区域・城西区城北区の広大な地域(庶民の居住区)に

ついで述べていて興味深い。(北魏洛陽の社

会と文化」服部克彦、ミネルヴァ書房、四九一五〇頁。他参照)

和の帝都 78

後漢末の各城は4本の小路で25分かれていたか? 1138 天
P 版 1352 曹魏新らくようから云 京師 67k
220の里 103' 同 67k
4770 118.11.2 大カ 742 80' 1352' 大カ 458

こ

洛陽伽藍記は卷一に洛陽城内のここの
みを記し、卷二に城東、卷三に城南、卷四に
城西、卷五に城北というふうに分け
て記述する構成になっている。
そして、卷五の終り近くに、
京師(都)は東西二十里、南北十五里で
戸数は十万余であつた。廟、社、宮室、
府曹のほかは、三百歩平方を一里とする。里
には四つの門があり、門には里正二人、吏四
人、門士八人を置いた。合せて二百二十の
里があつた。寺は一千三百六十七箇寺であつ
た。天平元年(五三四)に、
洛陽に残つてゐた寺は四百二十一箇寺であつ
た。
と記されてゐる。
つまり、九七城の城内(宮城)の中心として
四方に庶民の居住区である京城があつて、そ
の広さは、東西二十里、南北十五里であつた
という。
もつとも、現在の遺跡に、この外郭の城牆

和の帝都 78
大カ 459
大カ 1445
大カ 480
城のかき
20x20
塔は6字

宋史 652 402
前朝後帝 左祖右社
歩 1130 1352

前 20 分 について

こ

2021. 後漢代 (先に書いた) P
「地も300里と云ふ」 1130-2/2
①1046P 65頁へ
成同の漢明帝のときから成同が300里
と云ふのは、

①1137P 149
玄統・関羽
鉄門のかけに

北魏洛陽の社会と文化 50'
①1137P 149
玄統・関羽
鉄門のかけに、かかまっていた

①1137P 149
玄統・関羽
鉄門のかけに、かかまっていた

1179P

北魏洛陽の社会と文化 50' 8頁へ

北魏洛陽の社会と文化 50' 8頁へ

の痕跡が発見されていなのを見ると、外郭
城そのものは必ずしも堅固な大な作りではな
かったらしい。(「中国の帝都」村田治郎、
綜芸舎、七八頁参照)

域とは、きり区別されていたのであろう。
に準ずるところのものによって、都城外の地

この郭城の外(最外郭城の外)の地域は、曰京
東・曰京南・曰京西・曰京北と呼ばれてい
た。

洛陽伽藍記に曰京師と称さ
れてゐる地域は、洛陽都城(内城・宮城)の
四面に経営されてゐたところの大洛陽都城

外郭城)そのものを指していると考え
られる。

洛陽伽藍記の「洛陽」の二字
は、実はこの大洛陽都城(最外郭城内)を示
してゐるのであつて、決して、洛陽都城

城(宮城)のみを称するものでないことが分
かる。(「北魏洛陽の社会と文化」服部克彦、

ミネルヴァ書房、五〇頁参照)

12.5.01
北魏時代の

カコフ 2436
①1325-7

かたくなな民

殷の頑民

洛陽伽藍記 卷第五 (城北) に、こう記

されてゐる (巻頭の第11図参照)

洛陽城の東北に上商里があつた。殷の頑

民が住んでゐた所である。高祖(北魏の孝文

帝宏) 四七一一四九九は、聞義里と名づけ

た(改名した) (改)

遷都(四九四)の始め、此処に住む宮仕え

の者たちは互いに議りあい、とうとうみん

な立ち去つてしまつた。ただ焼物作りの職人だ

けがこの地に残り、都の焼物はみなこで作ら

れた。そこで世間の人は、洛陽城東北の上商

里、むかし殷の頑民が住んだ土地。今は職人

が食子造る。人みな立ち去り住民恥づくと

歌つたものだつた。しかし冠軍將軍の郭文遠

だけは、ここに別館を作つた。その邸の作り

と庭園は王侯にも匹敵するものであつた。

云々

とある。

前 1100年
239

徐徐 1121
同化 1560

1.181

余所

居所をかえ
転居

のち
他所へ移る

移川屋印

次頁
から

つまり、
洛陽宮城の東北
地区には、
殷の頑民
が住んでいた
という。

かつて（周初の頃）周公旦が、いまの洛陽
の地に内城（洛邑）および最外外郭城（成周）を
築いて、殷の遺民達を外郭城内に強制的に住ま
わせたから以降、
徐徐に、殷の人々の多くは
か代わるにつれて、
殷の人々の多くは

他の者達の中に混ざり込んでいった
と思われる。

1560
本末異なるものが同一に見えること
同じ性質に要めること

前頁4

カメイ作 ①1333^{P-3/2}
①1332^{P-1/3} 洛陽がらんキ 96^P

天のま
改行

1.182^P ①1100^P 洛陽がらんキ 96^P 104^P ①1332^{P-3/2} ①1339^{P-1/2} 洛陽の都
超勢 1179^P

前頁

と ころ か、 時 代 の 趨 勢 に 押 し 流 さ れ ず、
代 か ら 伝 わ る 遺 風 を 頑 に 守 り 通 し て い る 誇 り
高 い 人 々 か、 少 な か ら ず 居 た よ う だ。
この 日 殷 の 頑 民 と 称 さ れ る 人 々 は、 城 北
地 区 の 上 商 里 に、 固 い 絆 で 結 ば れ た 同 族 の 集 居 を つ
く り、 洛 陽 の 都 の 住 人 た ち か ら 奇 異 の 目 で み
ら れ 続 け た の で あ ろ う。
年 も 後、 北 魏 が 洛 陽 へ 遷 都 (四 九 三、 も し く は 四 九 四)
し た 当 初 の 頃、 こ こ に 住 居 を か ま え
た 宮 仕 え の 者 達 は、 互 い に 相 手 を 殷 の 頑
民 の 子 孫 な の だ ろ う と 疑 い あ い、 譏 り あ っ て、
へ と う と う、 み ん な 立 ち 去 っ て い ま っ た。
と い う の で あ る。
た だ、 焼 物 作 り の 職 人 だ け か、 こ こ に 残 り、
都 の 焼 物 は み な こ の 地 で 作 ら れ た の だ っ た。
も し か、 た ら、 焼 物 作 り の 職 人 と は、 殷 の
頑 民 の 子 孫 だ っ た の で は な か ろ う か、 (第 十 八
章「上 商 里」に お い て 思 う と ころ を 述 べ たい)

483^P 頑 と

カス作 ① 1333²/₂

② 1332¹/₃

③ 1180¹/₁₄

1.183¹/₂

人々は、

一日洛城東北の上商里、あかし般の頑民が住

んだ土地。今は職人が食子造る。人みな立ち

去り住民取らる

と歌ったという。(第十八章『上商里』において思

とさうを述べた)

■ともあれ、

①周公旦の頃から北魏に至るまで、宮城(洛

邑、後の九尺城・九七城)内は、常に時の支

配者・権力者・高官達の居住区とされた。

②一方、宮城を囲む最外外郭城内は、当初は

般民達が強制的に集められ、住まわされた

所であつたといえ、一般庶民の居住区に

宮仕えの下級役人達や、一般庶民の居住区に

なつていた。

と想定される。

*

ことか分る
 ①1185 45
 ②1210 129
 ③1103 1/2
 ④1103 1/2
 ⑤1103 1/2
 ⑥1103 1/2
 ⑦1103 1/2
 ⑧1103 1/2
 ⑨1103 1/2
 ⑩1103 1/2
 ⑪1103 1/2
 ⑫1103 1/2
 ⑬1103 1/2
 ⑭1103 1/2
 ⑮1103 1/2
 ⑯1103 1/2
 ⑰1103 1/2
 ⑱1103 1/2
 ⑲1103 1/2
 ⑳1103 1/2
 ㉑1103 1/2
 ㉒1103 1/2
 ㉓1103 1/2
 ㉔1103 1/2
 ㉕1103 1/2
 ㉖1103 1/2
 ㉗1103 1/2
 ㉘1103 1/2
 ㉙1103 1/2
 ㉚1103 1/2
 ㉛1103 1/2
 ㉜1103 1/2
 ㉝1103 1/2
 ㉞1103 1/2
 ㉟1103 1/2
 ㊱1103 1/2
 ㊲1103 1/2
 ㊳1103 1/2
 ㊴1103 1/2
 ㊵1103 1/2
 ㊶1103 1/2
 ㊷1103 1/2
 ㊸1103 1/2
 ㊹1103 1/2
 ㊺1103 1/2
 ㊻1103 1/2
 ㊼1103 1/2
 ㊽1103 1/2
 ㊾1103 1/2
 ㊿1103 1/2

浮橋・城南突出地域
 三国志に魏書(曹真伝)に

正始十年(二四九)正月、天子(曹芳)は洛陽城の南方九十里(約四十里)の高平陵(大石山)第一山(近傍)に築かれた明帝の御陵へ向かった。時に曹芳兄弟がみなこのお供をした。

その一瞬、司馬宣王(司馬懿)は、兵馬を指揮し、先ず武器庫を奪取した。後、城外に出て洛水の口浮橋のところに駐屯する。皇室の分家筋に当る(舟などを並べてその上板を渡した橋)

曹爽の罪状を上奏した。こうして司馬懿はなんなくこのクーデターに成功した。という。(「三国志」世界古典文学全集、筑摩書房)

一八九頁、二七七頁、四三八(九頁参照)すなわち、曹魏の時代当時、洛陽宮城の南を東流

洛水に、浮橋が掛け渡されていた。ということが分かる。

時代へ引き継がれていったようである。洛陽伽藍記第三卷、竜華寺条には、

2594
 1895
 5771
 628
 313
 伊水金名石

1.184^P-2/2

大カマ(267) 大カマ(267)
永マエ 橋ガケ 洛陽カラン記 63^P

三〇五(巻)
一〇一四

司馬宣王

北魏代の宮城の正門

宣陽門

の外四里

洛水のほとりに至ると

浮橋があった。いわゆる永橋である。

と記されている。(巻頭の第9図、第11図参照)

つまり、

宮城の正門の真南には洛水に浮かぶ浮橋

があった。

と解される。

*

浮橋

④ 1188- $\frac{1}{3}$
17行
すべて代入を繰り返す

1.185

天行

④ 1128^p 内直
-1/2 339

4个水圈 1124 $\frac{1}{2}$
 1128 $\frac{1}{2}$
 1128

ところで、洛陽伽藍記に、
 へ京師（最外外郭城）の規模は、東西二十里、
 南北十五里であつた。
 と記載されてゐるが、じつは何とて
 「北魏時代の最外外郭城の南には、洛水にか
 かつてゐる浮橋（永橋）がある」その南側一帯に伊水へ
 至るまでの五里におよぶ突出地域が交け
 られてゐた。
 という。（巻頭の第11図参照）
 出地域も城郭内にあると見られてゐたことが
 明らかだ。という。（「北魏洛陽の社会と文
 化」服部克彦、ミネルヴァ書房、六七頁参照）
 では、この五里の城南突出地域は、
 一体、いつ設けられたのだろうか。
 あるいは、この突出部は、後漢の光武が建
 武二年（二六年）南郊に祭天の壇（円丘）を
 作ったとき、いや、もっと古く、周代に
 まで遡るのかも知れないが、今となつてははつきりない。
 洛陽伽藍記・水経注・中国古典文学大系、平凡社、六四頁、三〇二頁。
 第十四章へ後漢の都日雒陽の頃（円丘参照）
 一かゝり、たとえ古くから、最外外郭城南面
 にさらに五里の突出地域があつたとしても、

H30(2018)2, 28(水) ~ 3, 2(4回)
H30(2018)2, 21(金) ~ 22(3回)

1.186^P

対称
元

⑤ 1356^P, 1358^{P-1/2}

順2, 3行

タイトル ⑤ 1352^P

下 1^{1/2}/₂
1^{1/2}/₂

*

画^{かく}について✓の項において^{考察}述べたい

人々が思い描く洛陽城は、
に述べられてゐる通り、基本的には、
へ東西二十里、南北十五里✓
であつたというところであらうと思ひこる。
* 尚、追つて述べるように、この物語では、
へ洛水にかかる浮橋の南の突出地域は、方
五里でなく、南北方向の中心線^{せん}を対称^{たいしん}
軸とする。東西四里・南北五里の広さだっ
たのであらう✓
と考へてみたい。
第十八章へ洛陽の町の区



⑤ 1094^P
115^P

門表 1155
1158-3/4 3行 宮城南面-門
1225 2021

1187-1/3
1154 1155 1158 1159
1225 2021 652 820

受け継ぐ 181
1155-1/2 表
1133-4/2 3/4
1159-3/4

北魏時代の宮城南面の門について

後漢時代の洛陽城(宮城)の南面の正門は、後漢の平昌門(平昌門)であった。

曹魏・西晋の平昌門へと受け継がれた。ところが、西晋時代に宮城の東南部が、東

側へ一里ほど拡張され、宮城南面東端に

新たな門(建陽門)が追加されたように想像される。

北魏の洛陽城復興に際しては、宮城南面に

四つの城門が設けられ、かつ幾分城門の

移動が行なわれた。そして、南面の正門も、後

漢の平昌門(曹魏・西晋の平昌門)から

次西の宣陽門に変わった。

宣陽門に変わったというよりも、曹魏・西晋時代には南面中央からやや西側に設けられていた宣陽門を、北魏時代と

新宮城内に配置。

由 1159^{3/4}

天つき
改行

⑤ 1159^{3/4}

⑥ 1185^{1/4} HL
「前代の通り」

1. 188^P - 1/3

⑦ 1187^{3/4} HL

⑧ 1187⁰ - 3/4 HL

古代中国の都市とその周辺
図 233

「古代中国の都市とその周辺」版部克彦、ミネルヴァ書房、二三頁参照

宮門―中央御道―俗に銅駝街という―宮

城の正門である(新)宣陽城門―城南御道―洛水

浮桁(浮橋・永橋)―内丘が一直線上にあった。

また、新宣陽城門の左、巨の裏りて、(西側

の)とであらう)には洛陽池があり、その池

東に後漢時代に正門であつた(旧)平城門跡があ

る。―かし、今、塞がれていいる。

恐らく(旧)平城門も(旧)宣陽門も

へ新宣陽門のすぐ西側に(旧)平城門があり、

(旧)平城門と(旧)宣陽門との間の城内側に

(城の)池

洛陽池があつたのであらう。

と観察される。

④ 水では、北魏時代の宮城の正門口(新)宣陽

門口は、何故、後漢時代の宮城の正門口(旧)平

城門口の位置に作られなかつたのであらう

か。

先に述べたように、北魏時代の洛陽城を発

掘した結果からいえば、

へ南宮の位置が、かなり北の方へ移動した

ように見うけられるという。(第十四章へ「宮

■ 夫ぶん

(1) 西晋代の建陽門けんやうもんの位置いちに、北魏代の北開かい

陽門やうもんを設け

(2) 西晋代の津陽門しんやうもんの位置いちに、北魏代の津しん

陽門やうもんを再建さいけんし

(3) 西晋代の平昌門へいしょうもんのすぐ西寄にしよりに宮城きやうじやう

の正門せいもんに新宣陽門しんせんやうもんを厳おごかに建立えんりやうし、

(4) 西晋代の平昌門へいしょうもんの東方一里余よのところ

に、新平昌門しんへいしょうもんを新設しんせつした

と思われ

■ つまり、北魏ほくぎ洛陽城南面中央部分の新宣せん

陽門やうもんに新平昌門しんへいしょうもんの間隔かんかくを少々いさう広げ

つの宮門きやうもんの見映えみはを良くしたのであろうで巻

頭の第10・11回参照

「83」④1188¹/₃ 209

「と」は多いから×10. ④1302¹/₅

1.188¹/₃

永明門 紫宸殿の正面 建礼門の内 承明門

1299¹/₃

宮城南面の門の位置の大幅な変更が行なわれ
たのだろうか。古来の四つの門の配置を踏襲し
て、それは「たぶん」
八土城の南面に四つの門を整然と並べ
て、より華麗なものとした。い
と考えられたからであらうと想像される。
＊なお、北魏時代に追加された「承明門」は
西晋時代までの旧宣陽門の代替として「基
壇の無い」少々小さな門とされ、馬車の通用門
として用いられたのかも知れない。（既述）
と、いつたこと等から推しはかると、曹魏の
明帝の時には、
《宮室―太極殿―雉門（麗華門）―南宮の
正門である庫門（中門）―中央御道（銅駝街）
―宮城の正門である平昌門―城南御道―最外
外郭城南端の門である端門―洛水にかかる浮
橋―内丘が、ほぼ一直線上にあった。》
ように思われる。（第十八章において詳述し
たい）

第9図参照

＊

司馬仲達の「浮橋」
「浮橋」由 1184 1/2
10行

新史記 721P
浮橋 178P
「浮橋」に「かたがへ」

1189P
おみ 866P

119P
天のき改行
改行

浮橋 について

洛水にかかる浮橋（浮桁ともいう）

①「浮橋は、普通、舟を並べて上に板を置いた橋のことである」

という。（「日本書紀」上）日本古典文学大系

岩波書店、ハ〇頁注十一参照）

・中国では、現在でも、多数の舟を横付けにし

て、対岸に至るまでおろりと並べ、渡り場として

いる光景が見られる。（写真図版 208 参照）

・また、黄河のやや上流域に位置する蘭州

付近において、かけ渡される浮橋は、川底に突

き刺した竿に小舟をつなぎ止めて流さず、な

ように固定し、こうした小舟を並べ、この上

に板を置く。（写真図版 209 参照）洛陽伽藍記・水

経注・中国古典文学大系（21）平凡社、二四九

二五〇頁参照）

②さらに又、水面にイカダを組んで渡したも

のも、浮橋と云ったという。（「新明解古語辞典」金田一春彦、三省堂「浮き橋」参照）

1187-3/4 12行
11324
1163

1.189^P-2/3

- ・カラー^{上半分}
- ・右側に配置する。
- ・限度一杯、大きく
はみ出させて掲載。

青角は
④1262^{1-2/2}
「黄河の要路」

中心ふりかけ
ゴ4
13QG

中心ふりかけ
ゴ4
14QG



カ
↑
ワ
↑
ト

船と船の間がくっついていない

カ
↓
ワ
↓
ト

馬真図版208 済南(山東省の省都)の西北を流れる黄河に掛け渡した『浮橋』

『泰山・曲阜と山東省内陸部』飯田辰彦 日経BP企画 2008年8月25日発行 87頁参照

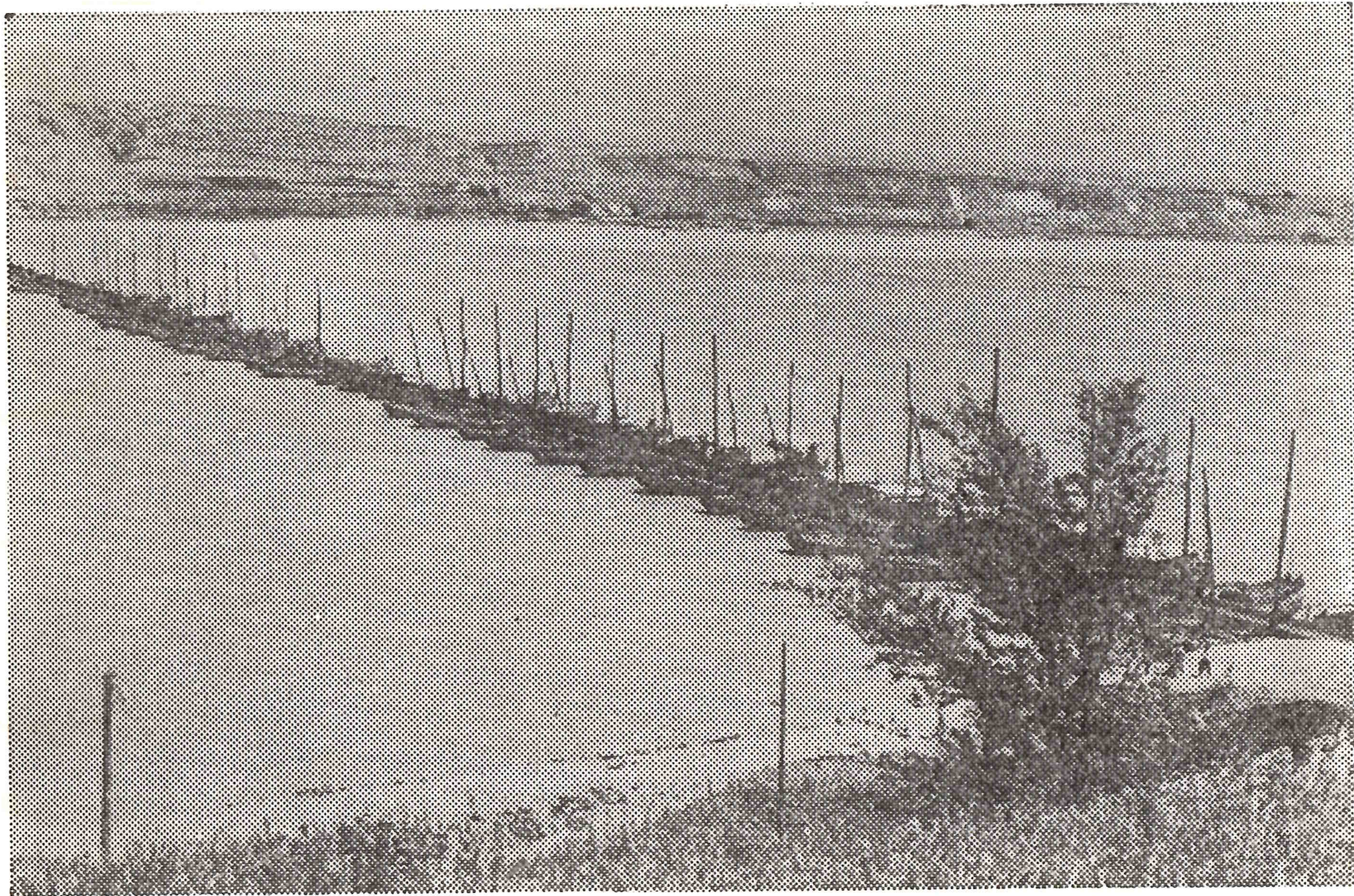
対岸まで船を多数並べ、船縁上に板を渡し、通路としている。数台の車が見える。

419^P

左頁の上半分に、大きくほみ虫させて掲載下さい。

1189P-3/3

・左頁上に
面配置



↑カ
↑フ

13QG

14QG 写真図版209 黄河上流域の浮橋

『洛陽伽藍記・水經注』中国古典文学大系、平凡社、250頁参照。

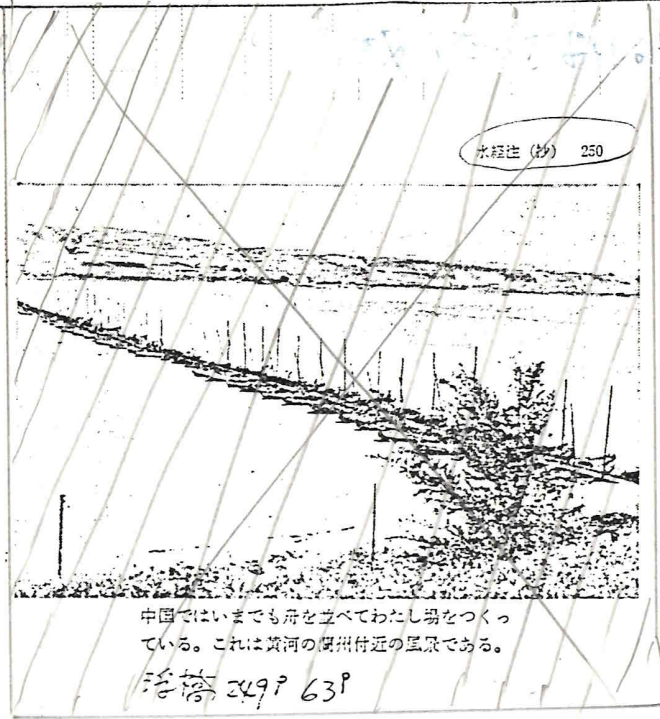
12QG

420P 大竜 5人1舟

黄河上流域あり。

・中国ではいまでも舟を並べてわたし場をつくっている。これは黄河の蘭州付近の風景である。

1.190^P



ともあれ「洛陽南郊の浮橋」(浮橋)は、
 多くの舟(ふね)もしくは幾つもの桁(へら)横(よこ)木(き)が川(かわ)を横切(よこぎ)ってずらりと並(なら)べられ、流(なが)れさ(さ)ないように各々(おのづから)が川底(かわぞこ)に固定(こてい)され、上(うへ)に板(いた)が渡(わた)され、洛水(らくすい)の流れ(ながれ)に浮(う)かんで、その姿(すがた)に揺(ゆ)れ動(うご)く姿(すがた)。

水面(みづうみ)に映(うつ)っている華震(かじん)・優雅(ゆうが)な橋(はし)だ(だ)ったのであ(あ)らう(う)や。
 * 一(ひと)かき曹魏(そうぎ)時代の日浮橋(ひぶきばし)は(は)「浮桁(うきげた)」(うきげた)がどのよ(よ)の橋(はし)だ(だ)ったのか(か)、提(てい)示(し)で(で)きる資(し)料(りょう)を持(も)ちあ(あ)れ(れ)てい(い)ない(ない)で(で)。

「山」290上の歌にあわせ
万4-181P 日1字半分
あけて下す。

万4-181
とある

万4-181P 左注。
万4-181P 左注。
万4-181P 左注。
万4-181P 左注。

万4-181P 左注。
万4-181P 左注。
万4-181P 左注。
万4-181P 左注。

木津川(の、上の瀬に板の懸け橋を渡し、淀
映え、帯のようにつめて流るる泉川(今の
と花が咲き繁り、秋になると黄葉が色美しく
大急山背の国の久瀬の都は、春になる
で、山背の国の久瀬の都は、春になる
浮橋渡しあり通ひ仕へまつらむ萬代ま
の川の二上つ瀬に打橋わたし淀瀬には
をり秋さへは黄葉にほひ帯はせる泉
山背の久瀬の都は春さへは花咲きを
三香の原の新しき都を讃むる歌
月、右馬頭境部宿禰老磨は、こう歌った。(万巻
十七三九〇七)
乃巻七三九〇七には天平十二年(七四
〇十二月に山背の久瀬の都へ遷都した翌年の二
とが あったようだが

令和2(2020)8.28(金) ~ 9.1(4回)

1.192^P

朝日新聞 地 市町村番号 147
：平成元年11.2付 恭仁寺 相楽 加茂
4.4.20付 加茂町 あった

9/1 178/31
8/29

水がきいていて浅 (いところ)

瀬には浮橋を渡し、いつも通って万代まで

仕え申し上げまよう (現在の京都府相楽郡加茂町) 近傍

即ち、久瀬の都の南を西流する泉川 (木津川)

の広受とした水面を横切って、美しい浮橋が

浮かんでいたのであらうと思われ。 (「朝日

新聞」平成元年十一月二日付「恭仁宮」。

平成四年四月二日付「恭仁宮」。

*

コビ小詩326
居士 学後か言いか
仕官いた人 人名大辞513

年月 1868
555.9.30付 794
大蔵 周李漢教 1/193-1/2

和同 H55(1980) 10.23 黄河行
(黄)新開の抜き 1/5
中口の香山

1103 1/2の地図
東洋新 713
記 1844

シエンシオン
小林 105
さん・たんな

「小」229

長恨歌・琵琶行等で名高い

小林 326

香山、そして邛山
黄河下流の華北平野と中国西部の高原地帯
とを結ぶ交通の要地、洛陽は黄河と洛水
の間にあつて、付近は小盆地状をなして、
東流する洛水は、同じく東流する伊水と合
流したのち、黄河に注ぎ込む。
そして、洛陽の都の北方には邛山が、
黄河の氾濫をさえぎっている。
一方、洛陽の都の南郊(洛水の南)の清登
な、伊水の南岸には香山と呼ばれる人ま
りとした山がある。(写真図版 210 へ香山参照)
洛陽の都は、こうした山ふところになりだか
れ、なんと九王朝約千年の都(首都もいくは
副都)となつたのだ。
さて、時代はかなり下るが、中国唐代の詩
人白居易(白居易)は、河南に生まれて、
中央の官職を歴任したのち、ふるさと
香山に居を定め、酒と詩に熱中して、
先生と号し、また香山にいたので香山居士と

香山 2476
カキウ
ウラ
カマ667
セサ
シン

大カマ 2254

大カマ 1865
芒山

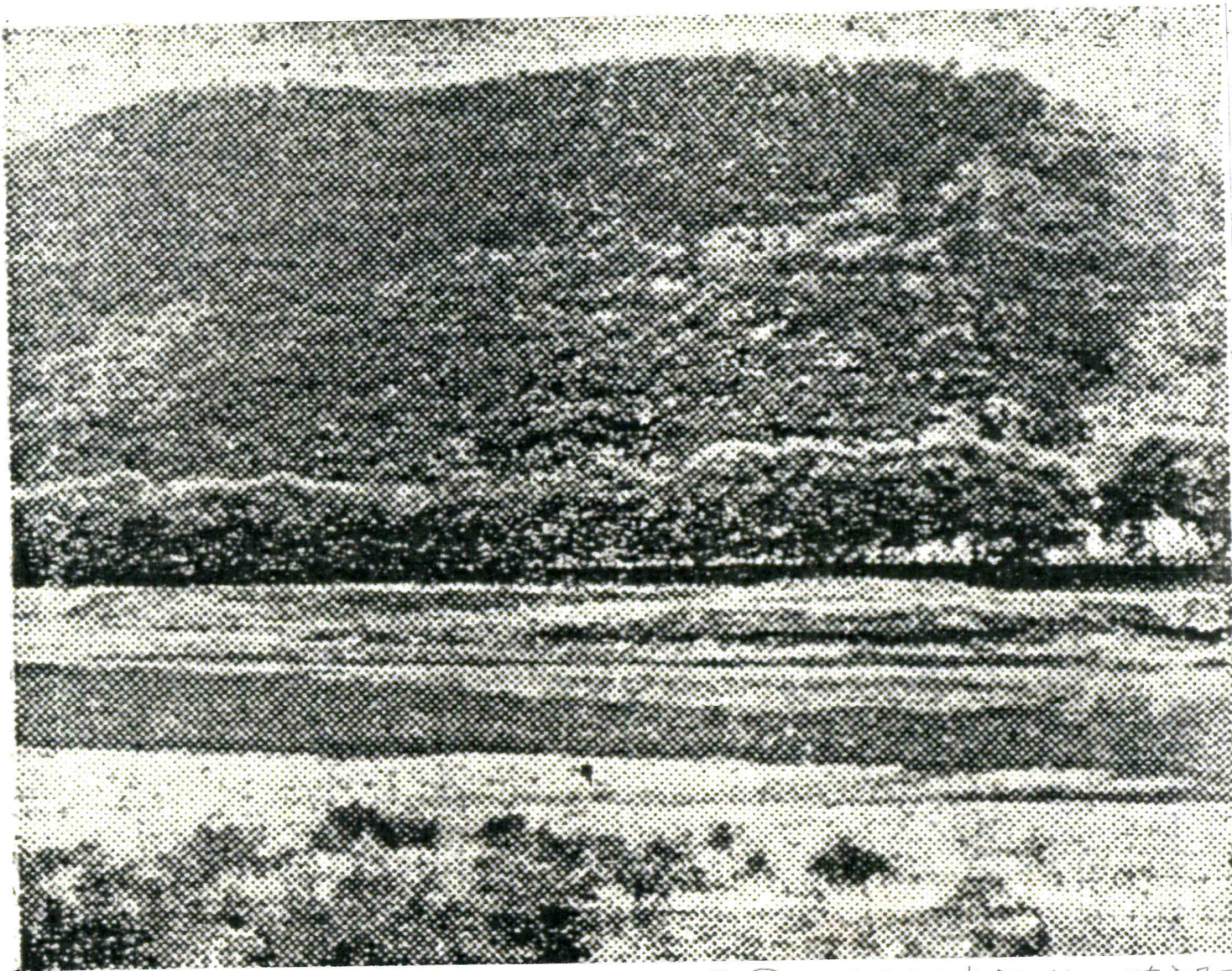
北木

・右頁右上(1/4頁)に、大きくはみ出して掲載下さい。 1,193^P-2/2

・空をきれいに
下さい。

(黒いヨゴレをトル)

・カラー写真が、
どうしても見つか
りませんでした。



由1195^P6行

香山の園情を
伝えている。

1399

1499

写真図版210 伊水南岸の『香山』

(洛陽市南郊で上田写真部員写す)

1199

『朝日新聞』昭和55年10月23日付〈黄河行〉参照

1194^p

次頁
から

も
称した。
この当時、長安が首都であった。
老いた將軍は副都とされており、年老いた將軍は

1.195^p 470^p 7/7
中央同文 (文) 香山の香
中国の香山

ちや隠居した文宣たちの保養地となっていた。
・ 激しい政争の圏外にあるこの洛陽に、白
・ 楽天は永任を決めたのであろうか。
・ 洛陽南郊の伊水の清流にその山容を写す
香山は、ゆるやかな起伏を見せていて、
地形は、ことなく嵐山の風情に似ている。
・ 香山の坂を少しのぼると、白
・ 楽天の墓がある。(「朝日新聞」昭和五
十五年九月三十日、同十月二十三日付「黄河行」参照)
もつとも、中国には、
・ 江南に生きた丘山に葬られるのが、最高
の幸せ。といういい伝えがある。
・ つまり、中国の人々は、洛陽北郊の墓地
・ 丘山に葬られることを望んだという。こ
の丘山に、大きな墓が長年にわたって築か
れ続けたのだった。
・ 江南に壮年時代を過ごし、洛陽北郊
の丘山にではなく、洛陽南郊の香山に葬
られ、白楽天の生涯は、最高に幸せ、とまで
はいえなかつたにせよ。

前頁

165^p

1977^p

2049^p

天 2299^P
人生在樂穀村

2299

✱